

常陸川の水門 漁農兩立を  
目的として築造されたものに (1)

小 松 浦 次

はじめに

自然環境の条理を阻害すれば当然の帰結としてその反動が生じる、常陸利根川宝山水門の閉鎖が霞ヶ浦、北浦、浪逆浦の水質悪化に迫車をかけていることは今更に論じるまでもない事象であるがどうしてこうなってきたか？ その経過を追跡してみよう。

◇ 水門築造までの経過 ◇

昭和十二年頃から同二十三年頃までにかけては戦時中から終戦直後の時代であり、我国の治水事業は放任のやむなき状態が続いたので、利根川下流方面に於ても河底に流砂が堆積して霞ヶ浦、北浦の水疏を著しく阻害した。これがために洪水になると、利根川本流から流入してくる逆水の影響を受けて十日も二十日も水が引かず、湖周沿岸の住民を苦しめた。昭和二十四年に至り、国土復興計画が進み、建設者は治水と食糧増産という一石二鳥の

ねらいから河底に堆積した土砂を浚い水疏をよくし、この土砂で利根川の蛇行時に出来た、水郷の江湖や湿地帯を埋立て耕地を造成した。当時を想起すると「サンドボンプ船」による浚渫工事で水郷大橋下流一部水域だけでも一期間に三五〇万立方mの土砂を浚っており、この埋立地帯で砂漠映画の撮影が出来たほど膨大な面積に達した。また食糧増産を目的として多くの遊水域が干拓されその面積は概算三〇方kmにおよんだ。これがために利根川本流と水続する湖口方面は水深を増して大洋への水疏が良くなり、湖水の水位も僅かながら低下を見るに至ったが、この反動として潮の差引が激しくなり、遊水域（干拓による）を失ったことも原因して上げ潮時に於ける海水の浸入は湖芯にまで達し、霞ヶ浦では麻生町島並沖附近にまでこの状況が観察され、海跡湖としての昔時を彷彿することが出来た。当時の記録によると、海水の浸入により漁獲を見た海魚（島並沖で）は「ギンガメアジ」「コーシロ」「カレイ」「クロダイ」「シイラギ」「ダツ」「シマイサキ」等で量は少なかったが二〇種におよんだ。また水通しが良くなったことが原因で北利根川旧牛堀橋の橋脚基礎が没落する椿事も見られた。北浦方面も同様で鹿島の神宮橋附近に於ける引潮時の流状は激しく、したがって活発な水の自浄作用も行なわれて、